

母

芥川龍之介

青空文庫

部屋へやの隅に据えた姿すがた見みには、西洋風に壁を塗った、しかも日本風の畳がある、——上シヤンハイ 海 特有の旅館の二階が、一部分はつきり映うつっている。まずつきあたりあたりに空色の壁、それから真新しい何なん畳じようかの畳たたみ、最後にこちらへ後うしろを見せた、西洋髪せいようがみの女が一人、——それが皆冷やかな光の中に、切ないほどはつきり映うつっている。女はそこにさつきから、縫ぬ物ものか何かいものしているらしい。

もつとも後は向いたと云う条、地味じみな銘めい仙せんの羽織うゑの肩には、崩くずれかかった前髪まえがみのはずれに、蒼白い横顔が少し見える。勿論肉の薄い耳に、ほんのり光が透すいたのも見える。やや長めな揉もみ上げあげの毛が、かすかに耳の根をぼかしたのも見える。

この姿見のある部屋には、隣室の赤児あかこの啼なき声こゑのほか、何一つ沈黙を破るものはない。未いまだに降り止まない雨の音さえ、ここでは一層その沈黙に、単調な気もちを添えるだけである。

「あなた。」

そう云う何なんぶん分かが過ぎ去のちつた後、女は仕事を続けながら、突然、しかし覺おぼつか束なさそうに、こう誰かへ声をかけた。

誰か、——部屋の中には女のほかにも、丹たんぜん前を羽織はつた男が一人、ずっと離れた畳の上に、英字新聞をひろげたまま、長なが々と腹はら這いになっている。が、その声が聞えないのか、男は手近の灰皿へ、巻まきた煙草の灰を落したきり、新聞から眼さえ挙げようとしな

「あなた。」

女はもう一度声をかけた。その癡女自身の眼もじつと針の上に止まっている。「何だい」

男は幾分うるさそうに、丸まる々と肥まるつた、口くちひげ髭の短い、活動家らしい頭を擡もたげた。

「この部屋ね、——この部屋は変えちやいけなくって？」

「部屋を変える？ だってここへはやつと昨夜ゆうべ、引越して来たばかりじゃあないか？」

男の顔はげんそうだった。

「引越して来たばかりでも。——前の部屋ならば明あいているでしょう？」

男はかれこれ二週間ばかり、彼等が窮屈な思しいをして来た、日当りの悪い三階の部屋が一瞬間の前に見えるような気がした。——塗りの剥はげた窓まど側の壁には、色の変った畳

の上に更紗さらきの窓掛まどかけが垂れ下っている。その窓にはいつ水をやったか、花の乏しい天竺葵アムが、薄い埃ほこりをかぶっている。おまけに窓の外を見ると、始終ごみごみした横町よこちように、麦藁帽むぎわらぼうをかぶった支那シナの車夫クルマヂが、所在なさそうにうろついている。……

「だがお前はあの部屋にいるのは、嫌いやだ嫌いやだと云っていたじゃないか？」

「ええ。それでもここへ来て見たら、急にまたこの部屋が嫌いやになったんですもの。」

女は針の手をやめると、もの憂うれそうに顔を挙げて見せた。眉まゆの迫った、眼の切れの長い、感じの鋭とがそうな顔だちである。が、眼のまわりの暈かきを見ても、何か苦勞くろうを堪こえている事は、多少想像が出来ないでもない。そう云えば病的な気がするくらい、米嚙こめかみにも静脈じようみやくが浮き出している。

「ね、好いいでしよう。……いけなくて？」

「しかし前の部屋よりは、広くもあるし居い心こころも好いいし、不足を云う理由はないんだから、——それとも何か嫌いやな事があるのかい？」

「何なにつて事はないんですけれど。……」

女はちよいとためらったものの、それ以上立ち入っては答えなかった。が、もう一度念を押すように、同じ言葉を繰り返した。

「いけなくって、どうしても？」

今度は男が新聞の上へ煙草たばこの煙を吹きかけたぎり、好いいとも悪いとも答えなかった。部屋の中はまたひっそりになった。ただ外では不相あいかわらず変、休みのない雨の音がしている。

「春はる雨さめやか、——」

男はしばらくたった後のち、ごろりと仰あおむ向きに寝ね転ころぶと、独り言のようにこう云った。

「蕪湖ウウフウ住みをするようになったら、発句ほくくでも一つ始めるかな。」

女は何とも返事をせずに、縫物の手を動かしている。

「蕪湖ウウフウもそんなに悪い所じやないぜ。第一社宅は大きいし、庭も相当に広いし、草花くさななど作るには持つて来いだ。何でも元は雍家ようか花園かえんとか云つてね、——」

男は突然口を噤つぶんだ。いつか森しんとした部屋の中には、かすかに人の泣くけはいがしている。

「おい。」

泣き声は急に聞えなくなつた。と思うとすぐにまた、途切とぎれ途切とぎれに続き出した。

「おい。敏子としこ。」

半ば体を起した男は、畳に片肘かたひじもた靠もたせたまま、当惑とうわくらしい眼つきを見せた。

「お前は己おれと約束したじゃないか？　もう愚痴ぐちはこぼすまい。もう涙は見せない事にしよう。もう、——」

男はちよいと瞼まぶたを挙げた。

「それとも何かあの事以外に、悲しい事でもあるのかい？　たとえば日本へ帰りたいとか、支那でも田舎いなかへは行きたくないとか、——」

「いいえ。——いいえ。そんな事じゃなくつてよ。」

敏子は涙を落し落し、意外なほど烈はげしい打消し方をした。

「私はあなたのいらつしやる所なら、どこへでも行く気でいるんです。ですけれども、——」

敏子は伏眼ふしめになったなり、溢あふれて来る涙を抑おさえようとするのか、じつと薄い下唇したくちびるを噛んだ。見れば蒼白い頬ほおの底にも、眼に見えない炎ほのおのような、切迫した何物かが燃え立っている。震ふるえる肩、濡ぬれた睫毛まつげ、——男はそれらを見守りながら、現在の気もちとは没交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた。

「ですけれども、——この部屋は嫌いやなんですもの。」

「だからさ、だからさつきもそう云ったじゃないか？　何故なぜこの部屋がそんなに嫌だか、

それさえはつきり云つてくれれば、——」

男はここまで云いかけると、敏子の眼がじつと彼の顔へ、注そそがれているのに気がついた。その眼には涙の漂ただよった底に、ほとんど敵意にも紛まがい兼ねない、悲しそうな光が閃ひらめいている。何故この部屋が嫌になつたか？——それは独り男自身の疑問だつたばかりではない。同時にまた敏子が無言むごんの内に、男へ突きつけた反問である。男は敏子と眼を合せながら、二の句を次ぐのに躊躇ちゆうちゆうした。

しかし言葉が途切とぎれたのは、ほんの数秒の間である。男の顔には見る見る内に、了解の色みなぎが漲みなぎつて来た。

「あれか？」

男は感動を蔽おほうように、妙に素そつ気けのない声を出した。

「あれは己も気になつていたんだ。」

敏子は男にこう云われると、ぼろぼろ膝の上へ涙を落した。

窓の外にはいつのまにか、日の暮が雨を煙らせている。その雨の音を撥はねのけるように、空色の壁の向うでは、今もまた赤児あかこが泣き続けている。……

二階の出窓には鮮かに朝日の光が当たっている。その向うには三階建の赤煉瓦にかすかな苔の生えた、逆光線の家が聳えている。薄暗いこちらの廊下にいると、出窓はこの家を背景にした、大きい一枚の画のように見える。巖乗な柵の窓枠が、ちようど額縁を嵌めたように見える。その画のまん中には一人の女が、こちらへ横顔を向けながら、小さな靴足袋を編んでいる。

女は敏子よりも若いらしい。雨に洗われた朝日の光は、その肉附きの豊かな肩へ、——派手な大島の羽織の肩へ、はつきり大幅に流れている。それがやや俯向きになった、血色の好い頬に反射している。心もち厚い唇の上の、かすかな生ぶ毛にも反射している。

午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。商売に來たのも、見物に來たのも、泊り客は大抵外出してしまう。下宿している勤め人たちも勿論午後までは帰って來ない。その跡にはただ長い廊下に、時々上草履を響かせる、女中の足音だけが残っている。

この時もそれが遠くから、だんだんこちらへ近づいて來ると、出窓に面した廊下には、

四十格好がっこうの女中が一人、紅茶の道具を運びながら、影画かげえのように通りかかった。女中は何とも云われなかったら、女のいる事も気がつかずに、そのまま通りすぎてしまったかも知れない。が、女は女中の姿を見ると、心安そうに声をかけた。

「お清きよさん。」

女中はちよいと会釈えしやくしてから、出窓の方へ歩み寄った。

「まあ、御精ごせいが出ますこと。——坊ちゃんはどうなさいました？」

「うちの若様？ 若様は今お休み中。」

女は編針あみばりを休めたまま、子供のように微笑した。

「時にね、お清さん。」

「何でございます？ 真面目まじめそうに。」

女中も出窓の日の光に、前掛まえかけだけくつきり照らさせながら、浅黒い眼もとに微笑を見せた。

「御隣の野村のむらさん、——野村さんでしょう、あの奥さんは？」

「ええ、野村敏子さん。」

「敏子さん？ じゃ私わたしと同じ名だわね。あの方はもう御立ちになったの？」

「いいえ、まだ五六日は御滞在ごたいざいでございましょう。それから何でも蕪湖ウウフウとかへ、——」
 「だつてさつき前を通つたら、御隣にはどなたもいらつしやらなかつたわよ。」
 「ええ、昨晚急さくばんにまた、三階へ御部屋が変りましたから、——」

「そう。」

女は何か考えるように、丸々まるまるした顔を傾けて見せた。

「あの方でしよう？　ここへ御出でになると、その日に御子さんをなくなしたのは？」

「ええ。御気の毒でございますわね。すぐに病院へも御入れになつたんですけれど。」

「じゃ病院で御なくなりなすつたの？　道理で何にも知らなかつた。」

女は前髪まえがみを割つた額ひたいに、かすかな憂鬱の色を浮べた。が、すぐにまた元の通り、快活な微笑を取り戻すと、悪戯いたずらそうな眼つきになつた。

「もうそれで御用済み。どうかあちらへいらしつて下さい。」

「まあ、随分でございますね。」

女中は思わず笑い出した。

「そんな邪慳じゃけんな事をおつしやると、蔦つたの家やから電話がかかつて来ても、内証ないしよで旦那様へ取次ぎますよ。」

「好いわよ。早くいらつしやいってば。紅茶がさめてしまふじやないの？」

女中が出窓にいなくなると、女はまた編物を取り上げながら、小声に歌をうたい出した。午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。部屋毎の花瓶に素枯れた花は、この間に女中が取り捨ててしまう。二階三階の真鍮の手すりも、この間に下男が磨くらしい。そう云う沈黙が拡がった中に、ただ往来のざわめきだけが、硝子戸を開け放した諸方の窓から、日の光と一しよにはいつて来る。

その内にふと女の膝から、毛糸の球が転げ落ちた。球はとんと弾むが早いか、一筋の赤を引きずりながら、ころころ廊下へ出ようとすると、——と思うと誰か一人、ちようどそこへ来かかったのが、静かにそれを拾い上げた。

「どうも有難うございました。」

女は籐椅子を離れながら、恥しそうに会釈をした。見れば球を拾ったのは、今し方女中と噂をした、痩せぎすな隣室の夫人である。

「いいえ。」

毛糸の球は細い指から、脂よりも白い括り指へ移った。

「ここは暖かでございますね。」

敏子は出窓へ歩み出ると、眩まぶしそうにやや眼を細めた。

「ええ、こうやって居りましても、居いねむ睡りが出るくらいでございますわ。」

二人の母は佇たたずんだまま、幸福そうに微笑し合った。

「まあ、御可愛いたあたですこと。」

敏子の声はさりげなかった。が、女はその言葉に、思わずそつと眼を外そらせた。

「二年ぶりに編針を持つて見ましたの。——あんまり暇なもんですから。」

「私なぞはいくら暇でも、怠なまけてばかり居りますわ。」

女は籐とうす椅子へ編物を捨てると、仕方がなさそうに微笑した。敏子の言葉は無心の内に、

もう一度女を打ったのである。

「お宅の坊ちゃんは、——坊ちゃんでございましたわね？ いつ御生れになりましたの？」

敏子は髪へ手をやりながら、ちらりと女の顔を眺めた。昨日きのうは泣き声を聞いているのも

堪えられない気がした隣室の赤児、——それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすの

である。しかもその興味を満足させれば、反かえって苦しみを新たにするのも、はつきりわか

つてはいるのである。これは小さな動物が、コブラの前では動けないように、敏子の心も

いつのまにか、苦しみそのものの催眠作用に捉とらわれてしまった結果であろうか？ それと

もまた手傷を負った兵士が、わざわざ傷口を開いてまでも、一時の快を貪るようになり、いやが上にも苦しまねばやまない、病的な心理の一例であろうか？

「この御正月でございました。」

女はこう答えてから、ちよいとためらう気色を見せた。しかしすぐ眼を挙げると、気の毒そうにつけ加えた。

「御宅ではとんだ事でございましたってねえ。」

敏子は沾んだ眼の中に、無理な微笑を漂わせた。

「ええ、肺炎になりましたものですから、——ほんとうに夢のようでございました。」

「それも御出で々にねえ。何と申し上げて好いかわかりませんわ。」

女の眼にはいつのまにか、かすかに涙が光っている。

「私などはそんな目にあつたら、まあ、どうするでございましょう？」

「一時は随分悲しゅうございましたけれども、——もうあきらめてしまいましたわ。」

二人の母は佇んだまま、寂しそうな朝日の光を眺めた。

「こちらは悪い風が流行りますの。」

女は考え深そうに、途切れていた話を続け出した。

「内地はよろしゅうございますわね。氣候もこちらほど不順ではなし、——」

「参りたてでよくはわかりませんが、大へん雨の多い所でございますね。」

「今年は余計——あら、泣いて居りますわ。」

女は耳を傾けたまま、別人のような微笑を浮べた。

「ちよいと御免下さいまし。」

しかしその言葉が終らない内に、もうそこへはきつきの女中が、ばたばた上草履を鳴らせながら、泣き立てる赤児を抱きそやして来た。赤児を、——美しいメリンスの着物の中に、しかめた顔ばかり出した赤児を、——敏子が内心見まいとしていた、丈夫そうに頤の括れた赤児を！

「私が窓を拭きに参りますとね、すぐにもう眼を御覚ましますって。」

「どうも憚り様。」

女はまだ慣れなそうに、そつと赤児を胸に取った。

「まあ、御可愛い。」

敏子は顔を寄せながら、鋭い乳の臭いを感じた。

「おお、おお、よく肥つていらつしやる。」

やや上じょう氣ぎした女の顔には、絶え間ない微笑が満ち渡った。女は敏子の心もちに、同情が出来ない訳ではない。しかし、——しかしその乳房ちゆうぶさの下から、——張り切った母の乳房の下から、汪然おうぜんと湧いて来る得意の情は、どうする事も出来なかつたのである。

三

雍家花園ようかかえんの槐えんじゆや柳ゆは、午過ひるぎの微風そよに戦そよぎながら、庭や草や土の上へ、日の光と影とをふり撒まいている。いや、草や土ばかりではない。その槐えんじゆに張り渡した、この庭には似合にあわない、水色のハムモックにもふり撒まいている。ハムモックの中に仰向あおもむけになった、夏のズボンに胴衣ちヨツキしかつけない、小肥こぶとりの男にもふり撒まいている。

男は葉巻に火をつけたまま、槐えんじゆの枝えだに吊つり下げた、支那風の鳥籠ちゆうなを眺めている。鳥は文ぶん鳥ちんちゆう 何かからしい。これも明暗の斑はんでん点てんの中に、止とまり木ぎをあちこち伝わっては、時々さも不思議そうに籠かごの下の男を眺めている。男はその度にほほ笑えみながら、葉巻を口へ運ぶ事もある。あるいはまた人と話すように、「こら」とか「どうした?」とか云う事もある。あたりは庭木の戦そよぎの中に、かすかな草の香かを蒸むらせている。一度ずつと遠い空に汽船

の笛ふえの響いたぎり、今はもう人音ひとおとも何もしない。あの汽船はどうに去ったであろう。赤あか濁かりに濁った長江ちやうこうの水に、眩まばゆい水脈みおを引いたなり、西か東かへ去ったであろう。その水の見える波止場はとばには、裸も同様な乞食こじきが一人、西瓜すいかの皮を噛かじっている。そこにはまた仔豚こぶたの群むれも、長々ながながと横たわった親豚の腹ちぶさに、乳房ちぶさを争あっているかも知れない、——小鳥を見るのにも飽あきた男は、そんな空想あに浸ひたったなり、いつかうとうと眠りそうになった。「あなた。」

男は大きい眼を明あいた。ハムモツクの側に立たっているのは、上シャンハイ海の旅館りやうかんにいた時ときり、やや血色ちよくの好いい敏子としこである。髪かみにも、夏帯なつたにも、中ちゆうがた形の湯帷子ゆかたにも、やはり明暗めいあんの斑点あくびを浴あびた、白粉おしろいをつけない敏子としこである。男は妻の顔かほを見たまま、無遠慮むえんりょに大きい欠伸あくびをした。それからさも大儀たいぎそうに、ハムモツクの上へ体を起たした。

「郵便ゆうびんよ、あなた。」

敏子としこは眼まなこだけ笑わらいながら、何本なんぼんか手紙てがみを男へ渡わたした。と同時に湯帷子ゆかたの胸むねから、桃色ももいろの封筒ふうとうにはいつている、小さい手紙てがみを抜ひいて見みせた。

「今日は私わたしにも来きているのよ。」

男はハムモツクに腰こしかけたなり、もう短い葉卷はまきを噛かみ噛かみ、無造作むぞうさに手紙てがみを読よみ始めた。

敏子もそこへ^{たたく}佇んだまま、封筒と同じ桃色の紙へ、じつと眼を落している。

雍家^{ようか}花園^{かえん}の槐^{えんじゆ}や柳^{りゆう}は、午過ぎの微風^{そよ}に戦^{そよ}ぎながら、この平和な二人の上へ、日の光と影とをふり撒^まいている。文^{ぶん}鳥^{ちゆう}はほとんど^{さえず}囀らない。何か唸^{うな}る虫が一匹、男の肩へ舞い下りたが、直^{すぐ}にそれも飛び去^さつてしまった。……

こう云うしばらくの沈黙^{のち}の後、敏子は伏せた眼も挙げずに、突然かすかな叫び声を出した。

「あら、お隣の赤さんも死んだんですって。」

「お隣?」

男はちよいと聞き耳を立てた。

「お隣とはどこだい?」

「お隣よ。ほら、あの^{シャンハイ}上海の××館の、——」

「ああ、あの子供か? そりや気の毒だな。」

「あんなに丈夫そうな赤さんがねえ。……」

「何だい、病気は?」

「やっぱり風邪^{かぜ}ですって。始めは寝冷えぐらいの事と思ひ居り候ところ、——ですって。」

敏子はやや興奮したように、口早に手紙を読み続けた。

「病院に入れ候時には、もはや手遅れと相成り、——ね、よく似ているでしょう？ 注射を致すやら、さんそきゆうにゆう酸素吸入を致すやら、いろいろ手を尽し候えども、——それから何と読むのかしら？ 泣き声だわ。泣き声も次第に細るばかり、その夜の十一時五分ほど前には、ついに息を引き取り候。その時の私の悲しさ、じゆうじゆう重々御察し下され度、……」

「気の毒だな。」

男はもう一度ハムモックに、ゆらりと仰向けあおむになりながら、同じ言葉を繰返した。男の頭のどこかには、いまだ未ひんしに瀕死の赤児が一人、小さい喘あえぎを続けている。と思うとその喘あえぎは、いつかまた泣き声まぼろしの中にも、妻の読む手紙に聴き入っていた。はそう云う幻の中にも、妻の読む手紙に聴き入っていた。

「重々御察し下され度、それにつけてもいつぞや御許おんもとさま様に御眼おんめにかかりし事など思い出され、あの頃はさぞかし御許様にも、——ああ、いや、いや。ほんとうに世の中はいやになつてしまう。」

敏子は憂鬱な眼を挙げると、神経的に濃い眉まゆをひそめた。が、一瞬の無言のちの後、鳥籠とりかごの文鳥を見るが早いか、嬉しそうに華奢きゃしゃな両手を拍った。

「ああ、好い事を思いついた！ あの文鳥を放してやれば好いわ。」

「放してやる？ あのお前の大事の鳥をか？」

「ええ、ええ、大事の鳥でもかまわなくつてよ。お隣の赤さんのお追善ついでんですもの。ほら、放鳥ほうちようつて云うでしょう。あの放鳥をして上げるんだわ。文鳥だつてきつと喜んでよ。」

——私には手がとどかないかしら？ とどかなかつたら、あなた取つて頂戴ちようだい。」

槐えんじゆの根もとに走り寄つた敏子は、空気草履くうきぞうりを爪立つまだてながら、出来るだけ腕を伸ばして見た。しかし籠を吊した枝には、容易に指さえとどこうとしない。文鳥は気でも違つたように、小さい翼つばさをばたばたやる。その拍子ひょうしにまた餌壺えつぼの黍きびも、鳥籠の外に散乱する。が、男は面白そうに、ただ敏子を眺めていた。反そらせた喉のど、膨ふくらんだ胸、爪つま先に重みを支えた足、——そう云う妻の姿を眺めていた。

「取れないかしら？——取れないわ。」

敏子は足を爪立つまだてたまま、くるりと夫の方へ向いた。

「取つて頂戴よ。よう。」

「取れるものか？ 踏み台でもすれば格別だが、——何もまた放すにしても、今直すぐには限らないじゃないか？」

「だって今直に放したいんですもの、よう。取って頂戴よう。取って下さらなければじめるわよ。よくって？ ハムモツクを解いてしまおうよ。——」

敏子は男を睨むようににした。が、眼にも唇にも、漲みなぎっているものは微笑である。しかもほとんど平静を失した、烈しい幸福の微笑である。男はこの時妻の微笑に、何か酷こく薄はくなものさえ感じた。日の光に煙った草木くさきの奥に、いつも人間を見守っている、気味の悪い力に似たものさえ。

「莫迦ぼかな事をするなよ。——」

男は葉巻を投げ捨てながら、冗談じょうだんのように妻を叱った。

「第一あの何とか云った、お隣の奥さんにもすまないじゃないか？ あつちじゃ子供が死んだと云うのに、こつちじゃ笑つたり騒いんだり、……」

すると敏子はどうしたのか、突然蒼白い顔になった。その上拗すねた子供のように、睫毛まつげの長い眼を伏せると、別に何と云う事もなしに、桃色の手紙を破り出した。男はちよいと苦にがい顔をした。が、気まずさを押しのためか、急にまた快活に話し続けた。

「だがまあ、こうしていられるのは、とにかく仕合せには違いないね。上シャンハイ海ハイにいた時には弱つたからな。病院にいれば気ばかりあせるし、いなければまた心配するし、——」

男はふと口を噤んだ。敏子は足もとに眼をやつたなり、影になつた頬の上に、いつか涙を光らせている。しかし男は当惑そうに、短い口髭を引張つたきり、何ともその事は云わなかつた。

「あなた。」

息苦しい沈黙の続いた後、こう云う声が聞えた時も、敏子はまだ夫の前に、色の悪い顔を背けていた。

「何だい？」

「私は、——私は悪いんでしょうか！ あの赤さんのなくなつたのが、——」

敏子は急に夫の顔へ、妙に熱のある眼を注いだ。

「なくなつたのが嬉しいんです。御気の毒だとは思うんですけれども、——それでも私は嬉しいんです。嬉しくつては悪いんでしょうか？ 悪いんでしょうか？ あなた。」

敏子の声には今までにない、荒々しい力がこもっている。男はワイシャツの肩や胸チヨツ衣キに今は一ぱいにさし始めた、眩い日の光を鍍金しながら、何ともその間に答えなかつた。何か人力に及ばないものが、厳然と前へでも塞がったように。

(大正十年八月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

母

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>